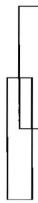


寄稿

議が現実はこの青森で催されて、この五月三十一日、六月一日の二日にわたり「第五回日韓文学シンポジウム」が青森市で開催された。ま



ず参加者の一人として、その手ごたえが想像以上のものであったことを銘記しておきたい。

同時通訳三人を陰に擁し、レシーバー・イヤホン三百台以上が配布され、まさに刻一刻と言葉の壁を超えながら人文学の現在を紡ぎ出されていく。私自身も、語りまた聴きつつ内からこみ上げてくる興奮を抑えきれなかった。こんな会

議が現実にはこの青森で催されて、この五月三十一日、六月一日の二日にわたり「第五回日韓文学シンポジウム」が青森市で開催された。ま

ず参加者の一人として、その手ごたえが想像以上のものであったことを銘記しておきたい。

同時通訳三人を陰に擁し、レシーバー・イヤホン三百台以上が配布され、まさに刻一刻と言葉の壁を超えながら人文学の現在を紡ぎ出されていく。私自身も、語りまた聴きつつ内からこみ上げてくる興奮を抑えきれなかった。こんな会

議が現実にはこの青森で催されて、この五月三十一日、六月一日の二日にわたり「第五回日韓文学シンポジウム」が青森市で開催された。ま

ず参加者の一人として、その手ごたえが想像以上のものであったことを銘記しておきたい。

同時通訳三人を陰に擁し、レシーバー・イヤホン三百台以上が配布され、まさに刻一刻と言葉の壁を超えながら人文学の現在を紡ぎ出されていく。私自身も、語りまた聴きつつ内からこみ上げてくる興奮を抑えきれなかった。こんな会

議が現実にはこの青森で催されて、この五月三十一日、六月一日の二日にわたり「第五回日韓文学シンポジウム」が青森市で開催された。ま

ず参加者の一人として、その手ごたえが想像以上のものであったことを銘記しておきたい。

同時通訳三人を陰に擁し、レシーバー・イヤホン三百台以上が配布され、まさに刻一刻と言葉の壁を超えながら人文学の現在を紡ぎ出されていく。私自身も、語りまた聴きつつ内からこみ上げてくる興奮を抑えきれなかった。こんな会

議が現実にはこの青森で催されて、この五月三十一日、六月一日の二日にわたり「第五回日韓文学シンポジウム」が青森市で開催された。ま

ず参加者の一人として、その手ごたえが想像以上のものであったことを銘記しておきたい。

同時通訳三人を陰に擁し、レシーバー・イヤホン三百台以上が配布され、まさに刻一刻と言葉の壁を超えながら人文学の現在を紡ぎ出されていく。私自身も、語りまた聴きつつ内からこみ上げてくる興奮を抑えきれなかった。こんな会

議が現実にはこの青森で催されて、この五月三十一日、六月一日の二日にわたり「第五回日韓文学シンポジウム」が青森市で開催された。ま

ず参加者の一人として、その手ごたえが想像以上のものであったことを銘記しておきたい。

同時通訳三人を陰に擁し、レシーバー・イヤホン三百台以上が配布され、まさに刻一刻と言葉の壁を超えながら人文学の現在を紡ぎ出されていく。私自身も、語りまた聴きつつ内からこみ上げてくる興奮を抑えきれなかった。こんな会

議が現実にはこの青森で催されて、この五月三十一日、六月一日の二日にわたり「第五回日韓文学シンポジウム」が青森市で開催された。ま

ず参加者の一人として、その手ごたえが想像以上のものであったことを銘記しておきたい。

同時通訳三人を陰に擁し、レシーバー・イヤホン三百台以上が配布され、まさに刻一刻と言葉の壁を超えながら人文学の現在を紡ぎ出されていく。私自身も、語りまた聴きつつ内からこみ上げてくる興奮を抑えきれなかった。こんな会

議が現実にはこの青森で催されて、この五月三十一日、六月一日の二日にわたり「第五回日韓文学シンポジウム」が青森市で開催された。ま

ず参加者の一人として、その手ごたえが想像以上のものであったことを銘記しておきたい。

同時通訳三人を陰に擁し、レシーバー・イヤホン三百台以上が配布され、まさに刻一刻と言葉の壁を超えながら人文学の現在を紡ぎ出されていく。私自身も、語りまた聴きつつ内からこみ上げてくる興奮を抑えきれなかった。こんな会

議が現実にはこの青森で催されて、この五月三十一日、六月一日の二日にわたり「第五回日韓文学シンポジウム」が青森市で開催された。ま



▲ながの・たかし 文芸評論家、弘前大学教授。1951年、福岡県生まれ。関

壁超えて「現代」語る

日韓文学シンポを終えて

長野 隆

彼らのボランティア精神は、午後6時、混沌(こん)の未来へ」と題して、各地公共団体の強力な支援ももたらした。韓国側から金英夏、申京淑、殷熙耕、そして「文学」ならではの馬燦濟の四氏、日本側から島田雅彦、藤原智美、藤沢周、広谷鏡子、星野智幸、

「混沌の未来へ」では、島田の「燃えつきたユリシイズ」、藤原の「メッセーボード」、藤沢の「海で何をしていた?」、広谷の「不随の家」、星野の「裏切り日記」が紹介され、まさに現在の日本の抱える多様な社会問題を意識させた。「私」という「個」の輪郭のなさや空虚さをいかに言葉が捕まえてくるか、という八〇年代以降から継続する文学的問題とも交差した。

井貞和と私の二人が参加した。考えてみれば、この問題ほど重要な日韓両国の言語にまつわる歴史的宿題もあずけるかたちをとった。二日目の午前は「語りの提出した詩作品の深層モチ

韓国の「吸血鬼」、申の「野原の中の高台の空き家」、殷の「他人への話しかけ」も韓国九〇年代以降の、現在日本の状況に通

西学院大文学部卒、同大学院日本文学専攻博士課程修了。近・現代詩論、太宰治を中心とする昭和文学論などを研究。著書に「抒情の方法」朔太郎・静雄・中世」、編著に「萩原朔太郎の世界」太宰治「その戦後を挟む思想の転位」など。集結をみた。

この画像は当該ページに限り、東奥日報社が利用を許諾したものです